**10年分の感謝**

　２月１３日、２３時８分、最大震度６強の地震は、被災地に暮らすものには「あの日」の記憶が一瞬にしてよみがえるものだった。そして１０年たっても「余震」なのだということと、震災への備えを怠ることはできないことも実感させられた。

節目だといわれる今年。様々な報道によって、悲しい思い出もあらためてよみがえるが、たいへんうれしいこともあった。

先日、名取市で花栽培を営む三浦さんをはじめとする方々が、たくさんのカーネーションの花束を手に連合宮城の事務所にこられた。１０年前、２メートルの津波に襲われ、ガレキで埋もれたカーネーション栽培の温室ハウスを、連合ボランティアがその泥やごみを撤去する作業を行ったことへのお礼の訪問とのことだった。

連合ボランティアは住宅地中心の作業を行っており、小規模の事業用施設での作業は珍しかったようだが、当時ガレキを前に途方に暮れていた三浦さんにとっては、４０名のボランティアによってみるみるきれいになっていくハウス内の姿に、心が折れそうになり「廃業」もよぎった日から、もう一度立ち直るきっかけになったといわれた。

今、震災の年に生まれたお子さんは小学生で、将来カーネーション農家をやりたいといっているそうである。三浦さんはボランティアの皆さん一人一人にお礼を言いたいともおっしゃった。

阪神淡路大震災時からはじまる連合災害救援ボランティア活動は、２０１１年東日本大震災時、まれにみる規模で実施され経験と多くの教訓を残した。この１０年の間でも、熊本地震など多くの災害において力を発揮し、社会的にも評価されている。

しかし何よりも、いつまでも感謝の気持ちをもっておられる被災者の方々がいるということに、連合全体で自信と確信を共有したい。

コロナで人の移動が制限され、被災地の現状をつぶさにご覧いただく機会も先送りとなっているが、被災地の連合宮城から１０年を振り返りあらためて全国の仲間にお礼を申し上げる。

**日本労働組合総連合会宮城県連合会**

**会　長　　小出　裕一**